



Title	ハンス・コーンにみるナショナリズム
Author(s)	馬場, 民生
Citation	北大法学研究科ジュニア・リサーチ・ジャーナル, 3, 279-304
Issue Date	1996-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/22278
Type	departmental bulletin paper
File Information	3_P279-304.pdf



ハンス・コーンにみるナショナリズム

ば ば たみ お
馬 場 民 生

目次

序	280
第1章 ハンス・コーンの生涯と時代背景	281
第2章 ナショナリズムの成立と定義	286
第3章 西と東	289
第4章 多民族国家	294
結び	302

序

近年、東欧革命とソ連分裂の影響もあり、ナショナリズムの研究は一つの流行と化している。そして、最近ではアンダーソンとゲルナーの画期的な著作が発表されるなど⁽¹⁾、ナショナリズムの研究は大きな進歩を遂げていると言ってよい。しかしよく見ると、ナショナリズム研究自体は以前から蓄積があり、様々なナショナリズム研究者が以前から多数登場しているのである。その中で、ヘイズ⁽²⁾と並んで第一次世界大戦後のナショナリズム研究の父祖と呼ばれるのが、ハンス・コーン(Hans Kohn)であった。彼は、これまでのナショナリズム研究の第一人者と目されており、実際また彼の業績は今日でもナショナリズムの研究に大きな影響を与えている。

ところが、ナショナリズム研究におけるコーンの研究の持つ重要性にもかかわらず、彼の死後もコーンに関する研究は意外に少ない⁽³⁾。確かに彼の著作は膨大な量であり多岐にわたっているけれども、コーンの本論はイギリスで発生した近代ナショナリズムが、フランス革命とともにヨーロッパ大陸全体に波及し、それがさらに時とともに世界中に広がったという理論構成を取っており、西欧を中心にナショナリズムの成立と展開について論じているのであって、コーンの本論の基本的枠組を明確にすることは可能である。本稿では彼の本論の枠組に沿ったコーンの本論の検討を通じて、彼のナショナリズム研究の特色を描き出すことを試みたい。

コーンはナショナリズムが近代の産物であることを論証した。そして、西のナショナリズムと東のナショナリズムが二つの極となって、時代が回転すると論じた。勿論、彼の近代西欧を普遍的基準とした本論には異論も多いはずである。しかし、彼のこのような本論の仕方には、それなりの理由があることも心に留めておかねばならない。第1章でも述べるように、コーンは様々な地域を訪れ、また彼自身もシオニストの一員としてナショナルな運動に参加する中で、西欧以外のナショナル

主義の持つ反動性や自己欺瞞を強く認識するようになる。例えば、ロシア革命と第一次世界大戦についてコーンが「文明によって課せられた抑制をいかに容易に人々が拒絶するかを、私に明らかにした」と述べているように、文明を生み出した近代西欧を彼が強く擁護し、西のナショナリズムを理想的に描き出すには、彼自身の経験がその根拠にあるのである。ナチスの経験が彼のこのような見解を強化したことは言うまでもない。

コーンはユダヤ人であるが、同時に西欧の生みだした理念を強く擁護した西欧人である。この意味で、本論では西欧人の典型的なナショナリズム論を検討することになると言って良いかもしれない。ナショナリズム研究が何度目かの流行を見せているこの時点で、近代ナショナリズムの光と影を早い段階で包括的に研究したコーンのいわば古典的な本論を検討整理することは、ナショナリズム研究の新たな展開の出発点となりうるであろう。

- (1) 代表的なものとして、B・アンダーソン『想像の共同体』(リポート・1987年)、Ernest Gellner, *Nations and Nationalism*, (Cornell University Press, 1983) を掲げておく。
- (2) Carlton J. H. Hayes, *The Historical Evolution of Modern Nationalism*, (The Macmillan Company, 1931), *Essays on Nationalism*, (Russel & Russel, 1966)
- (3) 私の把握している限り、日本でのハンス・コーン研究としては、小浪充「ハンス・コーンとナショナリズム」『ナショナリズムの研究』(慶応通信・昭和31年)、岩間一雄「H・コーンの本論」『ナショナリズムとは何か』(西日本法規出版・1987年)がある。海外における研究としては、Ken Wolf, "Hans Kohn's Liberal Nationalism: The Historian as Prophet", *Journal of The History of Ideas*, 1976, Vol.37 No.4, がある。

第1章 ハンス・コーンの生涯と時代背景

ハンス・コーンは1891年に現在のチェコの首都プラハに生まれ、1971年にアメリカで死去した。彼は膨大な量のナショナリズムに関する著作を残した。著名な「THE IDEA OF NATIONALISM: A Study in Its Origins and Background」を始め、彼のナショナリズム研究は、彼のたどった人生行路と切り離しては考えられない。そこでまず、コーンの生涯とその時代背景を見ることから始めたい。

コーンの生まれたプラハは、ゲルマンとスラヴの主要な戦場となっていた。中欧において近代ナショナリズムが生まれる1848年以前は、ボヘミアのチェコ人とドイツ人は全く平和に共存していた。1848年の3月に、パリの2月革命の風が中欧を吹き抜けたとき、プラハのドイツ人とチェコ人の学生は、立憲的自由と共通の母国の利益のために協力した。しかしながら、3カ月後に、ナショナリストの熱情が彼らを激しい敵に変えたのである(Kohn 1964, pp.7-8)⁽¹⁾。

このようなドイツ人とチェコ人の闘争が最高潮に達したのが、コーンが6才の時に起こった、1897年のバデーニ言語令発布にともなう政治危機であった。この言語令は、全ての文官勤務においてチェコ人をドイツ人と同等に扱うものであり、ドイツ人の強い不満と彼らの猛烈な反対運動を呼び起こした。事態を收拾するために、皇帝がバデーニを罷免すると、今度はチェコ人が議院内の議事妨害と大衆の反抗に立ちあがった。この衝突は平和的解決が出来なかった。結局、第一次世界大戦が始まるまで、どの内閣もこの問題を解決することが出来なかったし、ハプスブルク帝国自体が敗戦後ナショナリズムの噴出によって解体してしまったのである⁽²⁾。

このような民族⁽³⁾紛争を目撃しながら、コーンは成長した。彼にとってこれは「反動的ナショナリズム」であった。「私は、この態度に同意しない。私が長いあいだ小さな町で幸せに生活したにもかかわらず、私は都市とりわけコスモポリタンな都

市において常にくつろいだ気持ちがあった。」「ボヘミアにおけるドイツ人とチェコ人の間の衝突は、合理的に妥協によって解決されるべきである。」「しかし、ボヘミアの場合、正反対の主張のそのような和解は、」「過去——そしてしばしば狭く解釈された過去——から持ち越された幻と野心によって、そしてそのような幻によって引き起こされた感情によって妨げられた。」「この私の若い時の経験が、言わば、ナショナリズムの重要性の自覚を発達させるように私を運命づけた。」(Kohn 1964, pp.90-10)

ユダヤ人であったコーンはプラハのドイツ人大学に入学し、シオニスト学生運動に参加する。彼がシオニストになったのは、1908年の夏のことであり、17才だった。彼は「ほとんど20年にわたるシオニズム運動への参加は、多くの点で私の生活を富ませた。それは、ほとんどのナショナルな運動と政治的活動が持っている固有の落とし穴と自己欺瞞についてのより深い理解を私にもたらした」(Kohn 1964, p.53)と述べている。事実、彼のシオニストとしての経歴をたどると、コーンのナショナリズム運動に対する見方の特徴が浮かび上がって来る。

学生時代にコーンは、ブーバー(M. Buber)の影響を受けた「パール・コホバ協会(Bar Kochba association)」に属し、その熱心な構成員だった。パール・コホバとは、ローマの支配に対するユダヤ(パレスチナ南部の古代ローマ領)の最後の反乱(132-135 A.D.)を導いたユダヤ人の軍事司令官の名前であり戦闘的な感じがする。しかし、「私の時代には、パール・コホバ協会は軍事精神とメシア的期待には反対していた」(Kohn 1964, p.43)とコーンが述べている通り、通常の意味で戦闘的ではなかった。

当時のコーンに大きな影響を及ぼしたのは、アハド・ハアム(Ahad Ha-am=「国民の一人」)というペン・ネームで知られる、ロシアのヘブライ人著者であるギンツベルク(A. H. Ginsberg)である。彼は、当時の指導的なヘブライ文化雑誌『ハシロア(Hashiloah)』の編集者を6年間務め、東

欧のユダヤ知識人層に強力な影響力を行使したことで知られている。

アハド・ハアムはヘルツル (T. Herzl) に代表される政治的シオニズム⁽⁴⁾に批判的であった。多数のユダヤ人がパレスチナに移民することは出来ないものであり、政治的シオニズムは失敗すると彼は考えた。1891年にパレスチナを訪れたアハド・ハアムは以下のように報告している。「この地方は無人の土地ではない。アラブ人、そのなかでもとくに町に住む者は、ユダヤ人の活動や願望を良く知っている。しかし彼らはそれらが真に危険なものとならない限り、気づかないふりをしているのだ。しかしいつかユダヤ人が強力になり、アラブ人の優位性を脅かすようになれば、彼らとしてもこの事態を平静に受けとめることはほとんどないであろう。」⁽⁵⁾このようなアハド・ハアムの見解にコーンは「はるか過去の1891年に、彼は、シオニスト達によってしばしば見落とされた事実である、パレスチナにおけるアラブ人の存在の重要性に対し注意をうながした」(Kohn 1964, p.54)と述べて賛同している。

コーンはまた、「彼のシオニズムは、ヘルツルのように、政治的抑圧とユダヤ大衆の貧困または反ユダヤ主義の存在に集中しなかった。むしろ、それは創造的精神の中でユダヤ主義の予言的遺産を継続させようとする試みであった」(Kohn 1964, p.54)とも述べている。事実、アハド・ハアムが関心を寄せたのは、ディアスポラのユダヤ民族の文化的危機であって、ユダヤ人が直面していた政治的危機ではなかったのである。しかし、コーンが言うように、「ユダヤ人の国家またはパレスチナにおける多数は、彼にとって非現実的である」「だけではなく、不必要であるように見えた」(Kohn 1964, p.54)かどうかは疑わしい。確かにアハド・ハアムは、「パレスチナは、ユダヤ民族の政治的、経済的な根拠地ではなく、文化、精神の中心地となるべきである」⁽⁶⁾と考えていたが、同時に「ユダヤ人がその住民の多数派になり、土地のほとんどを所有して初めて、パレスチナは我々の精神的中心地になるであろう」⁽⁷⁾とも述べているのであ

る。彼は、パレスチナの住民の多数がユダヤ人になることを望んでいたのであり、そのことが「不必要である」とは考えていなかった。アハド・ハアムのこのような見解に彼の同時代人の多くは気付かなかったのであり、コーンもこの例外ではなかった。

多少の誤解があったにせよ、このようなアハド・ハアムの思想の影響下で、コーンは政治的シオニストではなく、文化的シオニストになった。コーンのこの選択は、彼の「国民国家の数を増大させることと主権を誇ることの賢明さを疑う私の一般的態度と、数と権力への信頼に対する私の不信と一致した」(Kohn 1964, p.55)のであった。

コーンに影響を与えたもう一人のシオニストが、ブーバーである。彼は、ユダヤ主義やユダヤ民族の未来に関する一連の発言の中で、シオニスト運動に参加している青年知識人達に影響を与えた。

ブーバーにとって、ヘルツルのシオニズム運動との出会いは、その生涯に一大転機をもたらす重要な事件であったが、しかし、それにもかかわらず間もなく彼はヘルツルの政治的シオニズムと訣別せざるを得なくなる。彼が求めたものは、単に政治的意味におけるユダヤ人の国家再建ではなかった。むしろ彼はより根源的に、ユダヤ人全体の精神的ルネッサンスを地盤とする、より幅の広い文化的精神的運動としてのシオニズムを求めたのであった。彼は政治的シオニストに対して以下のように主張した。真の民族の再生は、決して純粋な国家主義的傾向から生まれえない。ユダヤ民族の再生の核心はユダヤ的国家主義ではなく、むしろユダヤのヒューマニズムでなければならない⁽⁸⁾。

このようにヒューマニズムに焦点を合わせたブーバーにとって、パレスチナにおけるユダヤ人とアラブ人の協調は当然の主張であった。ユダヤ人がアラブ人の生活を侵害することなしに、ともに協力して土地に奉仕することは決して不穏当なことでも不可能なことでもない。ユダヤ人はアラブ人を支配するのではなく、彼らとともに生活し

彼らに奉仕すべきである⁽⁹⁾。

ブーバーは、1909年1月にコーンの属していた「パール・コホバ」で、初めてユダヤ精神についての連続講演を行い、その内面的精神的意味の解明を試みた。「パール・コホバ」との接触はその後も多年にわたって続き、多くの学生⁽¹⁰⁾に深い感銘を与えた⁽¹¹⁾。「ブーバーの知的広さは、私達のシオニズムを文化的狭さから守ったのであり、私達のナショナリズムを幅の広いヒューマニタリアンで世界主義的な見解と両立出来るようにした」(Kohn 1964, p.69)とコーンは述べている。アラブ人との共生を主張する文化的シオニストとしてのコーンの立場は、ブーバーとの接触を通じてますます強固なものとなったのである⁽¹²⁾。

しかし、ブーバーの二重国家論が政治的シオニストとアラブの双方から非現実的な空想として厳しい批判を受けたように、コーンの文化的シオニストとしての立場もパレスチナの現実の前に揺らいでいく。

シオニズム運動時代を通じてコーンは、排他的で極端なナショナリズムに警告を発し続けた。彼はナショナリズムを集合的現象としての権力への意志を表現するものと捉え、権力に対する意識をニーチェ(F. W. Nietzsche)から学んでいる。ニーチェは権力への意志を全ての生活の根本的特徴として考えた。コーンは以下のように述べている。「若いときに私は、人の動因を理解するにあたり、マルクスよりもニーチェによって印象づけられた。権力への意志は経済的考慮よりも強いのであり、その権力とともに自己中心のナショナリズムは他のナショナリティの労働者の平等に対する階級意識的な関心よりも時代の代表者をより強く駆り立てるように私には思えた。」(Kohn 1964, p.29)⁽¹³⁾

コーンはニーチェを通じて権力(そしてその集合的現象としてのナショナリズム)を意識するようになった。こうして近代の政治的生活の中心的動因としての権力の根本的性格を理解すればするほど、彼は権力の賛美をますます嫌うようになる。

コーンにとって、アクトン卿(Acton)が定式化した権力に対する不信は、政治の評価の恒久的な

基準であった。「なるほど、さまざまな悲劇的な結果を伴う権力意志は、人間性の不可欠の一要素であり、歴史における不可抗の動因の一つである。しかしながら、それを賛美する必要はない。必要なのはそれを抑制することである。権力機構を具えた国家は、人間社会の一つの欠くべからざる要素である。しかし、それを賛美すれば、それは人間の自由を保護する手段となる代りに、人間を奴隷にする怪物になるおそれがある。」(コーン 昭和28年, 151頁-152頁)

ニーチェのほかにカント(I. Kant)からも、コーンは影響を受けた。「彼らの取り組み方は非常に異なっているにもかかわらず、研究が私に影響を与えた著者は、カント(倫理的そして政治的著作双方において)、ショーペンハウアー、ニーチェそしてベルグソンであった。」「しかし、1920年代以後、ショーペンハウアーまたはベルグソンの多くを再読することはなかった。」(Kohn 1964, p.60)啓蒙運動とフランス革命において表現された、個人の自由と道徳的力へのカントの冷静な熱中は、外見上はそれらが道徳的エリートのニーチェの概念と衝突するようには見えなかったにもかかわらず、自由な自決へのニーチェの根本的信頼と一致するようにコーンには思えた。双方とも個人の自立と尊厳を深く気に掛けた厳格な倫理的人間であったのである。

コーンはカントを以下のように解釈した。カントは全ての人の発達の目的として、自由な個人の普遍的社会を心に描いた。人は、特定のネーション、階級またはカーストではなく、全ての人に適用可能な原理である絶対的な相互性(reciprocity)の原理の上で常に行動すべきである。彼の普遍主義は、市民の自由と人々の平和を保証する立憲的共和国の組織である、合理的法の下の世界秩序を要求した。

カントは時々より深い意味でプロイセン人であると考えられている。プロイセン人の義務と規律の強調とカントが義務を第一に置くことは、倫理的態度における類似性を明らかにするように見える。しかしコーンによると、その類似性は表面的

なものに過ぎない。それらの起源と本質において、それらの態度は異なるだけでなくむしろ対立するのである。プロイセン主義が国家を中心にしたのに対して、カントの哲学は国家に対するいかなる理解も愛着も示さなかった。プロイセンが権威と服従の上に作られたのに対して、カントの哲学は平等と自律の上に作られた。確かに、カントの大胆さと自律の主張は精神的私生活に限られたのであり、公的政治的生活において、彼はドイツに特徴的であった権威への服従を受け入れた。宗教の領域におけるカントの意見が体制と衝突したとき、彼は服従した。しかし、倫理的哲学において、カントは自由への人間の進歩の断固たる主張者であった。

カントは何よりも法に基礎付けられた普遍的な世界秩序の設立に関心をもった。ネーションが人の歴史に出来る唯一の貢献は、自由と法の普遍的秩序に向かっての進歩を助けることである。カントはスイス、オランダそしてイングランドにおける革命を近代史におけるもっとも重要な出来事として考えた。何故ならそれらの出来事は自由への道を表現したからである。(Kohn 1948, pp.396-402)。

コーンにとって、カントの思想はネーションを越えるものだった。ナショナリズム研究者であるコーンは、カントからネーションを越える思想を学んだのであり、またコーンの個人の自由に対する信頼を強固にしたのである。

ちょうど大学での課程を終えたころ、コーンは予期せぬ人生の転機を迎える。第一次世界大戦が勃発したのだった。サラエボ事件とともに始まったこの戦争に、彼の住んでいたオーストリア・ハンガリー帝国は真先に参戦した。そのためにコーンはオーストリア・ハンガリー帝国軍の一兵士として戦場に向かうことになる。

コーンはいわゆるチェコスロバキア軍団の兵士としてロシア軍に捕えられ、トルキスタンとシベリアで5年近くにわたって捕虜生活を送っている。この多民族国家での抑留生活のあいだ、彼は比較的自由的な生活を送り、革命期のロシア社会を

直接体験し、ナショナリズムにより深い関心を抱くようになるのである。

ロシア革命とそれに続いた内戦は、その残酷さと残忍さゆえにコーンに強い印象を与えた。希望の精神とともに始まった3月革命は、すぐに深刻な疑いと激しい憎悪の支配する状態になり、内戦は悲劇的に激化していった⁽¹⁴⁾。「戦争の苦痛のみならず」「私がロシアで目撃した革命と反革命の残忍性と乱暴もまた私に不快感を与えた。」「私が閉じ込められていた所である、ロシアにおいて、特にシベリアにおいて、内戦の間、私は多くのこの残酷さを目撃した。」「第一次世界大戦とポリシェヴィキ革命は、私達が文明と呼ぶ見せかけがいかにも薄いか、原始主義が表面のいかに近くに残存しているか、文明によって課せられた抑制をいかに容易に人々が拒絶するかを、私に明らかにした。」「コーンはこの時代に見られた、争いと極端なナショナリズムを嫌悪した。「1917年から1920年にかけての世界の出来事は、私の注意を歴史に集中させ、私を平和主義者にしもした。」「第一次世界大戦から、私は、権力、役人そしてお偉方を嫌ったのであり、そして私は、ナショナルな誇りと独善性の過剰と、戦争に固有の残忍さと残酷さをぞっとするほど嫌ったのである。」(Kohn 1964, pp.105-108)

コーンはコルチャック将軍が統轄していたシベリア地方がポリシェヴィキの手に落ちるのを知り、1920年にウラジオストク経由で帰欧することを決心する。彼の母国では、帝国が崩壊し、チェコスロバキア政府が樹立されていた。それはその領土内に住んでいる他の集団を犠牲にした単一の民族的言語的集団を主体とする新国家であった。戦争の経験が戦争へと導いたナショナリズムを減らすことはなかった。全く逆であった。コーンは、シオニスト組織で働くために、このような母国から去ったのである。

パリを経てロンドンに住んでいたコーンは、1925年の夏に、彼の妻とともにパレスチナに移動することを決める。彼はここで中東と西アジアのナショナリズム運動を研究し、「NATIONAL-

ISM AND IMPERIALISM IN THE HITHER EAST」などの数々の著作をものにした。彼自身が「私は1914年の秋に私の母国を去ったのであり、そして私のその後の帰還は短期間の滞在に限られた。私は以来、多くの場所に住んだが、私はそれらの全ての場所でくつろいだ気持ちがあった。」「1920年から1931年の間に、私はパリ、ロンドンそしてエルサレムに住んだ。」「私は、これらの都市と土地において十分にくつろいだ気持ちがあった。」(Kohn 1964, p.121, p.123)と述べているように、彼はパレスチナにおいても「流浪者(exile)」ではなく「くつろいだ気持ち」があったのかもしれない。しかし、ラカーが「作家で歴史家のハンス・コーンも、ユダヤ人はパレスチナに歴史的権利を持たない、ユダヤ人の要求の唯一の根拠は、彼らのツィオンへの愛である、と主張したひとりであった。早くも一九一九年に、彼は「新しい移民者の排外主義」と彼らのイギリス帝国主義への依存を非難していた⁽¹⁵⁾と述べているように、彼はパレスチナの(アラブ問題を中心とする)問題点を早くから認識していたのであり、現地でこの問題を目撃すればするほど彼のパレスチナにおける「くつろいだ気持ち」は失われていったのである。

ほとんどのシオニスト指導者はアラブ民族運動を誤解していた。彼らは、多くのアラブ住民は政治に全く興味をもっていないと確信していた。アラブの攻撃はアラブ住民の間の犯罪的な分子か、あるいは道徳的節度を持たぬ扇動家によって興奮させられた群衆が起こした、単なる略奪や殺人行為として描かれた⁽¹⁶⁾。

このように、ほとんどのシオニストは、アラブ民族運動の政治意識の程度と、その政治的影響力を過小評価した。事実は違った。アラブ人のシオニズムに対する抵抗は、民族的性格を持っていたのである⁽¹⁷⁾。コーンはこのことに気付いていた数少ないシオニストのうちの一人であった。「不幸にも、ある事実がユダヤ人の意識にほとんど浸透しなかった。その国は完全に不毛な砂漠なのではなく、アラブ人が13世紀にわたって——恐らく、その土地に住んでいるユダヤ人と同じぐらい長い期

間——そこに住んでいたのであり、これらのアラブ人が周囲の人々とともに単一のネーションを形成したのである。」にもかかわらず、「テオドール・ヘルツルは土地のない人々のために人の住んでいない土地を要求した。」(Kohn 1964, pp.139-140) ヘルツルがアラブ人の存在を無視していることをコーンは批判したのである。

シオニズムは中東に不穏状態をもたらした。シオニストはアラブ問題を軽視し、アラブ人との共生は絶望的に見えた。こうした中で、133人のユダヤ人が殺害され、数百人が負傷した1929年暴動が発生する。しかしこのような事件が起こっても、シオニスト達は、アラブ人は故意に嘘の噂を広めていた一部の指導者に扇動され、(辱められてはいなかった)宗教的名誉を守り、(流されてもこなかった)アラブ人の血のために復讐しようとするに至ったのであると、考えた⁽¹⁸⁾。問題を認識していたコーンは、この暴動の後にシオニスト運動から去る事を決めた。ほぼ20年間にわたって参加してきたシオニズム運動から去ったのであり、容易な決定ではなかった。それほどパレスチナの現実に失望したのであろう。

コーンはシオニズム運動から去ったのであり、新しい母国と新しい経済的基礎を捜し求める必要があった。コーンが1929年の秋に新しい住み家を探すことを決心したとき、彼は38才であった。

コーンは1931年と1933年に、ニューヨークのIIE(国際教育協会)の招きで渡米する。パレスチナの現実に失望していたコーンは、1933年にアメリカ合衆国へ移動し、1934年にはスミス・カレッジのヨーロッパ近代史の教授に就任したのである。1933年の秋にパレスチナからアメリカ合衆国へ去ったとき、彼は42才だった。

(1) 良知力『向こう岸からの世界史』(未来社・1978年)を参照

(2) G・シュタットミュラー『ハプスブルク帝国史』(力水書房・1989年)181頁-182頁、矢田俊隆『ハプスブルク帝国史研究——中欧多民族国家の解体過程——』(岩波書店・1977年)261頁-

- 287 頁, A・J・P・テイラー『ハプスブルク帝国 1809-1918』(筑摩書房・1987 年) 284 頁-322 頁
- (3) nation という単語は、「民族」とも「国民」とも訳すことが出来る。英文を参照した場合は原語の発音を標記(「ネーション」)し、訳書を使用した場合は、その本の訳(「民族」または「国民」)に従った。
- (4) 政治的シオニズムとは、ユダヤ人文化とユダヤ教に対して関心を持たず、もっぱら政治的手段によってユダヤ人国家を建設することを目指す人々の運動である。それに対して、文化的あるいは精神的シオニズムの人々は、ユダヤ人の伝統文化の再活性化こそユダヤ人国家建設の基礎であると考えている。アハド・ハアムは文化的シオニズムの代表的論客である。下村由一「シオニズム」「アハド・ハアム」『世界大百科事典』(平凡社・1988 年)
- (5) W・ラカー『ユダヤ人問題とシオニズムの歴史』(第三書館・1991 年) 304 頁
- (6) ラカー・前掲書(注 5) 118 頁
- (7) ラカー・前掲書(注 5) 242 頁
- (8) 平石善司『マルチン・ブーバー——人と思想——』(創文社・1991 年) 23 頁-24 頁, 191 頁-192 頁
- (9) 平石・前掲書(注 8) 202 頁
- (10) ヴェルチュ(R. Weltsch) は、パール・コホバにおけるコーンの同窓生である。アラブ人とユダヤ人による二重国民連邦(binational federation)を主張したヴェルチュもまた、コーンと同様にアハド・ハアムとブーバーから強い影響を受けている。Stephen M. Poppel, *Zionism in Germany 1897-1933*, (The Jewish Publication Society of America, 1976), p.144, pp.145-146, p.152
- (11) 平石・前掲書(注 8) 25 頁
- (12) コーンにはブーバーについての著作がある(Kohn 1979)。
- (13) コーンはナチスの基礎としてのニーチェ主義について論じている。しかし、彼は、ニーチェをナチスの理論家として全面否定するのではな

く、ニーチェを国家を警戒し個人の自立に情熱的関心を持っていた思想家として高く評価し、その上でニーチェの思想の持つ危険な側面を指摘している(第 3 章)。このようなニーチェに対するコーンの肯定的評価は、彼がナチスを目撃する以前にニーチェの影響を受け、ニーチェの思想を比較的冷静に検討出来る精神状態にあったからであろう(Kohn 1962, pp.207-221)。

- (14) G・ボッフア『ソ連邦史 第一巻 1917~1927』(大月書店・1979 年) 112 頁-113 頁
- (15) ラカー・前掲書(注 5) 360 頁
- (16) ラカー・前掲書(注 5) 355 頁-356 頁
- (17) ラカー・前掲書(注 5) 359 頁
- (18) ラカー・前掲書(注 5) 369 頁-370 頁

第 2 章 ナショナリズムの成立と定義

以上の様な個人史的背景の下に展開されたハンス・コーンのナショナリズム研究は、どのような特色を持っているのであろうか。そして、ナショナリズムをどのようにとらえて行くのだろうか。本章では、彼がナショナリズムの成立と定義を巡る問題点についてどのように論じているかについてみることにする。主著「THE IDEA OF NATIONALISM」においてコーンは古代にまで遡ってナショナリズムの起源を見いだしている⁽¹⁾。とはいえ、彼の議論の中心はあくまで近代ナショナリズムにあり、ナショナリズムの起源を古代にまで遡るのも近代ナショナリズムを説明するためであった。コーンの議論の中心は、言うまでもなく近代以降にあり、それ故ここでもコーンの近代ナショナリズム論に的を絞る。

コーンによれば、近代ナショナリズムは、まず最初に 17 世紀のイギリスで成立した。ピューリタン革命は、近代ナショナリズムの初めての表現である。人の自由の名の下に、教会と国家の伝統的権威が初めて挑戦を受けた。そして、イギリス・ナショナリズムは、他のいかなる地域でも見られないほど、個人の自由と不可分なものとされたのである。新しいナショナリズムは根本的にリベラルで普遍的であり、全人類へのメッセージを伝え

ており、全ての個人の自由と平等を（常に認めているわけではないにせよ）含んでいた。また、17世紀のイギリス・ナショナリズムは、全てのイギリス人の精神の忘れられない部分となったのであり、教養階級に限られるものではなく、人々全体を結び付けるものとなったのである。人々はもはや歴史の客体ではなく、全ての人が平等に個人として参加することを呼びかけられた、ネーションすなわち歴史の主体であった（Kohn 1940, pp.79-87, 1948, pp.166-169, 1955, pp.16-17）。

18世紀になると、自由な個性が人間活動の政治的文化的経済的な全ての領域に現れる。この新しい秩序は、個人の自由を社会的統合の必要性といかに調和させるか、すなわち人を超越する絶対的権威を失った法にいかんにか人を従わせるかという重大かつ困難な問題を提起した。ここで、ナショナリズムは、自律的な個人を共同体に結び付けるものとなったのである。この問題を初めて認識したのが、ルソー（J. J. Rousseau）である。彼は近代ナショナリズムの父であり、個人の自由を擁護したと言われている（Kohn 1948, p.226）。この個人の自由を守るために民主主義という制度が生まれた。民主主義は、自由に選ばれる代表制度と人々に責任のある行政部の上に基礎付けられた政府の形態である。それは、全ての個人の平等な権利、（思想と表現の自由を含めた）自由そして幸福の追求を、法の至上権によって守るのである。

17世紀のイングランドが近代民主主義の発祥地となる⁽²⁾。宗教的熱狂とともに、イギリス革命は近代世界における自由への道を切り開いた。17世紀の二つの革命の結果として、イングランドは絶対主義権力がはっきりと破壊された唯一の国であり、民主主義の成長は遅かったにもかかわらず、その基礎がしっかりと設立されたためにイングランドはいかなる後退も決して知らなかったのである（Kohn 1949, pp.185-189）。

ナショナリズムは解放運動である。18世紀まで、人間は野獣であった。ローマ時代には、人間は円形競技場の恐怖の戦慄を楽しんだ。中世から17世紀にかけて、人間は残酷な死刑、鞭打つ拷問

といった見せ物に群がった。ルネッサンスと宗教改革の時代においてさえ、人間は、古い伝説や迷信の効力、魔法使いや妖術使いの存在を信じようとしたのである。このような状況を打破したのが自由であった。前近代社会から個人の自由を擁護する近代社会への移行が、ナショナリズムの保護の下で行われる。ナショナリズムは、開放社会を目指した、非常にヒューマニタリアンな運動であったのである（コーン 昭和43年, 63頁-64頁, コーン 平成2年, 77頁-78頁, Kohn 1964, p.169）。

ナショナリティは共通の系譜（descent）、言語、領土、習慣、伝統そして宗教といった特徴を持つ。しかし、いずれの特徴もナショナリティの存在にとって不可欠ではない。ナショナリティの形成における言語の重要性はヘルダー（J. G. Herder）とフィヒテ（J. G. Fichte）によって強調されたが、独自の言語を持たないナショナリティも多数存在する（例えば、スイスでは四つの言語が話されている）。英語圏の国々は部分的に似通った系譜（同じ言語、同じ歴史的背景、非常に似通った伝統と習慣）を持つにもかかわらず、しばしば衝突する異なったナショナリティを表明する。ノルウェーとデンマークは、共通の人種の血統を持ちほとんど同じ言語を話すにもかかわらず、彼らは彼ら自身を二つのナショナリティとして考えている。つまり、ナショナリティは正確な定義を受け付けない。それ故に、ナショナリティは絶対的なものではないというのがコーンの本質的主張である。そしてコーンによれば、今日のほとんどの極端論者に責任があるもっとも大きな誤りは、ナショナリティを絶対的なものとするところである（Kohn 1948, pp.13-14, 1942, pp.85-86）。

ゲルナーは「ナショナリティの理論の構築のための二つの特に有力な候補があった。すなわち意志（will）と文化（culture）である。明らかに、それぞれが重要で適切である。しかし、まさに同じく明らかなのは、どちらもかなり不十分であるということである。」⁽³⁾と述べている。コーンは活発で活動的な集合的意志（a living and active cor-

porate will) をナショナリティの形成においてもっとも本質的な要素であると考えた。つまり、コーンは、意志を重視していると言ってよい。ナショナリティは、ナショナリティを形成するという決定によって形成された。このナショナリティを形成しようとする意志が、ナショナリティの形成に欠かせない幾つかの客観的条件を効果的に新しい重要性和意味を与えるのである。このような自発的な要素を欠いたナショナリティは、近代ナショナリズム以前のもので、人種のような「客観的」要素にナショナリティを基礎付けることは、原始的種族主義への先祖帰りを伴う。近代において、ナショナリティを形作るのは、血の呼びかけではなく、理念の力である (Kohn 1948, pp.15-16, 1942, pp.91-93)⁽⁴⁾。

ナショナリティと密接に関連して出てくるのがナショナリズムである。「ナショナリズムとは、大多数の人々に浸透し全てのその構成員に浸透することを要求する心の状態である。それは、国民国家を政治組織の理想的形態として、そしてナショナリティを全ての創造的文化的エネルギーと経済的福利の源泉として認識する。それゆえに、人の最高の忠誠は、彼自身の生活がその福祉に基礎付けられておりその福祉によって可能になっていると思われるのだから、彼のナショナリティに向けられる。」

コーンによれば、ナショナリズムはまず何よりも「大多数の心の状態」である。近代以前にも、個人がナショナリズムに似た感情を表明することはあったが、それは個人に限られていたのであった。次いで、ナショナリズムは「国民国家を政治組織の理想的形態として認識」した⁽⁵⁾。このような政治的境界が民族的 (ethnographic) あるいは言語的境界と一致すべきだという要求も、近代以降のものである。かつては、都市、領地、王朝の結び付きによって一緒になった多言語国家、普遍的世界国家が、理想の形態として考えられていた。さらに、ナショナリズムは「創造的文化的エネルギーの源泉としてナショナリティを認識」した。それ以前は、ほとんどの歴史において、宗教が文

化的生活の真の源泉とみなされたのであり、人の教育も国境に縛られなかったのである。また、ナショナリズムは「経済的福利の源泉としてナショナリティを認識」した。ナショナリズムのこの側面は、重商主義とともに絶対君主の時代に準備された。重商主義は、上から課せられたものである。経済的ナショナリズムがネオ重商主義を引き起こし、レッセ・フェールの時代になったのである。最後に、ナショナリズムの時代の人々は「ナショナリティに対する最高の忠誠」を表明する。ほんの数世紀前までは、人の忠誠の対象は宗教だった。人の最高の忠誠がナショナリティに固定されることによって、ナショナリズムの時代が始まったのである (Kohn 1948, pp.16-18, 1942, pp.93-97)。

以上を要約すると、まず初めに 17 世紀のイギリスで近代ナショナリズムが現れた。ナショナリズムは解放運動であり、ナショナリズムとともに民主主義という制度が生まれた。ナショナリティの形成においてもっとも本質的な要素は、ナショナリティを形成しようとする意志であり、人の最高の忠誠がナショナリティに固定されることによって、ナショナリズムの時代が始まったのである。

- (1) 「コーンの「近代主義」(ネーションとナショナリズムの完全な近代性への信念) は、彼の近代以前のエスニックな動因の包含によってやわらげられる。」 Anthony D. Smith, "Nationalism and the Historians", *International Journal of Comparative Sociology*, Vol. XXXIII, Number 1-2, January-April, 1992, p.65
- (2) ここでの民主主義は、democracy の訳である。コーンは、democracy を自由と平等の理念の具体的形態としてとらえている。当時のイングランドで実現されたのは自由であって、平等の具体的形態として民主主義が完全に実現されたわけではない。コーンも「民主主義の成長は遅かった」と述べて、このことを認識している。
- (3) Ernest Gellner, *Nations and Nationalism*, (Cornell University Press, 1983), p.53
- (4) コーンのナショナリティについての議論に、

極端なナショナリズムに対する警戒心が読み取れる。ナショナリティを血のような一見客観的なものに基礎付けて、絶対的なものとすることを警戒している。

- (5) 今日の政治状況を念頭に置いた以下のような批判がある。「この定義は、それがナショナリズムを国民国家のみに関連づける限りにおいて、もっとも狭いものである。そのように定義することによって、コーンは国家を持たない人々のナショナリズムを自動的に排除し、私達の時代におけるもっとも強力なナショナリズムの表明の一つを無視している。」Montserrat Guibernau, *Nationalisms*, (Polity Press, 1996), p.48
 このような批判は、恐らく、政治化したエスニック・グループ（ナショナル・マイノリティ）の存在を念頭に置いたものであろう。今日でも、スミス（Anthony D. Smith, *The Ethnic Origins of Nations*, (Blackwell, 1986)）のような例外を除いて、ナショナリズム研究とエスニシティ研究とは断絶していることが多い。梶田孝道「民族・国家・エスニシティ」論の現状と課題」大澤真幸他（編）『民族・国家・エスニシティ』（岩波書店・1996年）247頁

第3章 西と東

前章で述べたように、近代ナショナリズムは、まず初めに17世紀のイギリスで現れた。このイギリス・ナショナリズムは、個人の自由と不可分なものとされた。しかし、このように個人の自由を実現し民主主義と結び付いた解放運動として始まったナショナリズムも、地理的に拡大していくとともに、質的变化を伴う事になる。ハンス・コーンは、この質的变化を、西と東⁽¹⁾のナショナリズムに分類し類型化することによって明確にした。「彼は「東のネーション」「西のネーション」というターミノロジーを用い」「東ヨーロッパ(ドイツを含む)では、「非合理的」なナショナリズムを生み出したのに対し、「西ヨーロッパ」では「そのナショナリズムも「合理的」なものであると論じた。「民主主義」対「ファシズム」という第二次大

戦史観がこの議論の中に反映されていることを見てとることは容易であろう。しかし、そのイデオロギー性を抜きさるならば、「二つの概念は分析枠組として無視できぬ意義をもっているように」⁽²⁾思われる。そこで、本章では、西と東のナショナリズムについてコーンがどのように論じているかについてみることにする。

コーンによると、ヨーロッパ大陸における近代的な政治生活は、フランス革命とともに始まった。革命は、ヒューマニタリアンな世界主義を国民主権国家の新しい観念と融合した。そして、フランス革命は、西欧社会に二重の衝撃を与えた。長く確立された自由の観念をもち、地方の自治政府と権力制限の機構を有する国々（アメリカ、イギリス、スイス、スカンジナビア、オランダ）においては、それは民主主義を強化した。他の国々、特にドイツとイタリアにおいて、フランス革命は軍事的ナショナリズムを呼び起こした。フランス・ナショナリズムと世界主義的個人主義の結合は、これらの国々では受け入れられなかったのである。つまり、ヨーロッパ中に広がったナショナリズムの新しい感覚は、フランス・ナショナリズムに対立するようになった。フランス革命のナショナリズムは、個人の自由と合理的世界主義を結合させた。それに対する闘争の中から生まれたドイツとイタリアのナショナリズムは、フランス・ナショナリズムと正反対の要素を強調する傾向があったのである（Kohn 1949, pp.19-21, コーン昭和43年, 11頁-16頁）。

1848年2月末に、フランスで再び革命が発生し、第二共和制が成立する。この新しい革命は、ヨーロッパのほとんどあらゆる所で、1789年の二重の遺産、すなわち自由主義とナショナリズムを導入した。しかも、半世紀前と同じく、ナショナリズムは自由主義よりも強力であった。ナショナリズムは西欧から、全く異なった社会的条件と政治的伝統を持つ、中欧と東欧へと移植された。国民国家は中欧と東欧において、それが西欧において意味したこと、すなわち個人の立憲的自由と寛容のための闘争において樹立された、法に基礎付

けられた自由な市民の共同体を意味しなかった。この新しいナショナリズムは、市民の自由のはるか上方に措定された集会的な権力を強調した。ナショナリズムは、内部における自由よりも外部からの自立を意味する傾向があった。19世紀にナショナリズムは、リベラルなヒューマニタリアニズムから攻撃的な排他主義へ、個人の尊厳の強調から集団の権力の強調へと変化したのである(Kohn 1949, p.7, コーン 昭和43年, 17頁)。そうした流れは20世紀にも引き継がれる。第一次大戦後になると、多くの民族が「解放され」、独立国家を形成する。しかし、多くの場合、抑圧からの自由を要求した民族が、独立するやいなや、自ら他民族に対する抑圧者となり、ときによってはいっそう悪質な抑圧者となったのである(コーン 1957年, 25頁)⁽³⁾。

このようにして、ナショナリズムは西から東へと波及した。ナショナリズムの伝播は、同時に質的变化を伴ったが、コーンは西と東のナショナリズムを対比して論じる事によって、この質的变化を明快に論じた。そこに彼のナショナリズム論の特色の一つがある。少々長くなるが、彼の論述を引用する。

「思想の影響力は非常に強く、西欧では、社会的、経済的、政治的現実の変化にナショナリズムが対応していたのに対し、中欧と東欧ではナショナリズムに対応する社会的、経済的变化が起こるまえに、ナショナリズムが広がることになった。」「国によって過去から受けついで制度や社会条件はさまざまに異なっており、したがってナショナリズムはそれらに出くわして、それらに適合させられたり、修正させられたりした。解釈の違いによってさまざまな型のナショナリズムが生み出された。リベラルな中産階級という考えに立って、ナショナリズムの究極に民主的な世界を考えたものもあれば、啓蒙主義以前の非合理主義に基づいた排他的なナショナリズムを説くものもあった。」「西欧のナショナリズムは、過去にたいしてあまり感傷的にとらわれること

なく、現在の政治的な現実と政治闘争のなかで、ネーションを作り上げる努力をしているうちに登場してきたものである。ところが東欧のナショナリストは、しばしば過去の神話と未来への夢をもとにして、理想化された祖国像を作りあげた。それは、過去と密接につながり、現在とほとんど直接的なつながりを持たず、しかもいつかは政治的現実になるであろうと期待されたものであった。彼らはこうして、自らは実現する直接的責任を持たないような諸特性によって、彼らの理想とする祖国像を好きなように飾りたてた。それらの諸特性は未成熟なネーションが自己自身や自己の使命をどう考えるかという点で大きな影響力を持ったのである。」「イギリス、フランス、ネーデルランド、スイス、合衆国、イギリス連邦加盟諸国のような西欧世界では、ナショナリズムの登場は主として政治的な出来事であった。やがて国民国家となるべきものがナショナリズムの登場以前にすでに存在するか、合衆国の場合のように、国民国家の形成とナショナリズムの登場が同時に起こっていたからである。ところが中欧や東欧やアジアなど西欧以外の世界では、ナショナリズムは西欧よりおくらせて登場したのみならず、一般に社会や政治の発展がより遅れた段階で登場してきていた。現存国家の境界線とナショナリティの境界線は一致しなかった。ここでのナショナリズムは既存の国家の型と対決する形で成長した——ただし、主として国家を人民のものとするためではなく、国境線を民族の要求(ethnographic demands)する境界線にしたがって引きなおすために対決したのである。」(Kohn 1948, p.457, p.330, p.329)⁽⁴⁾

コーンによると、西のナショナリズムが「政治的運動」として始まったのに対して、東のナショナリズムは「文化的運動」として始まった。西欧で18世紀に発生したナショナリズムは、主に政府権力を制限し市民権を守ろうとした政治的運動であり、その目的はリベラルで合理的な市民社会を

作り出すことにあった。ナポレオン戦争以後、他の地域にもナショナリズムが波及する。その地域では西欧よりも「社会や政治の発展がより遅れた段階」であり、中産階級が弱かった⁽⁵⁾。そのため、その地域でのナショナリズムは、文化的運動、すなわち学者と詩人の夢と希望として始まったのである。

東のナショナリズムは初め西欧の影響を受けていた。しかし、このまきに西欧への依存が、教養階級の誇りを傷付け、彼らをして西欧のリベラルで合理的な見解に敵対させたのである。こうして、この新しいナショナリズムは、その正当化と西欧との区別を、その「過去」の遺産に求めるようになったのである。その西欧に対する劣等コンプレックスが、しばしば自己の過大評価を生み出した。(例えばナチスのように)自らを特別に上等な人種(アーリア人種)であるとみなしがちであったのである(Kohn 1955, pp.29-30, コーン 昭和43年, 31頁)。

以上の議論についてコーンは次のようにまとめている。「ネーションと祖国に関して二つの主要な概念が現れた。」「一つは政治的自由と人の権利の根本的に合理的で普遍的な概念であり、将来を見ている。また、世俗化したストア派キリスト教の伝統が生き続けた。」「それは、教養ある中産階級の政治的経済的強さと社会民主的に組織された労働運動にその主要な支えを見いだす。もう一つのネーションは、歴史すなわち古代と部族の連帯の神秘に戻りさえもし、記念碑と墓地の上に根本的に創設された。それは過去すなわちネーションの間の相違と自立を強調した。それはその支えを何よりも貴族と大衆の間に見いだしたのである。ナショナリズムのこれらの二つの概念は、その無数の変種と変遷とともに、新しい時代が回転する極である。」(Kohn 1948, p.574)

コーンは、このような西と東へのナショナリズムの分類を、後に「開かれたナショナリズム」(open nationalism)と「閉ざされたナショナリズム」(closed nationalism)という言葉でも表現している(Kohn 1968, p.66)。このように、コーン

はスナイダーが「コーン・二分法」(The Kohn Dichotomy)と名付けた明確なナショナリズムの分類を晩年まで用い続けたのである⁽⁶⁾。

先に引用して述べたように、「民主主義」対「ファシズム」という第二次大戦史観がこの議論の中に反映されていることを見てとることは容易である。この議論の背後には、ナチス・ドイツの体験がある。コーンはユダヤ人であり、既にシオニズム運動から去っていたとはいえ、ナチスのユダヤ人虐殺は衝撃的な経験であったはずである。ナチス・ドイツについて彼はどのように考えていたのであろうか。彼にはナチス・ドイツについての本格的な研究がある。東のナショナリズムの典型的現象であるナチス・ドイツについて、コーンが、いかに論じているかについて以下みることにする。

コーンはまず、ナチス・ドイツ以前のワイマール共和国の分析から始める。ワイマール共和国は大衆へのメシア的訴えを欠いていた。ワイマール政府は、畏敬もユートピア的希望も鼓舞せず、英雄や英雄詩も生み出さなかった。ドイツの人々は、このようなワイマール共和国を理解出来なかったのである。また、ワイマール共和国の実際の権力と知的権威は、官僚、大学教授、司法、軍人にあり、その圧倒的多数が過去に憧れ、議会体制を拒絶していた。ワイマール共和国は、非効率と墮落、そして何よりも軍事力の欠如を非難された。議会主義のあら捜しが、共和国を人々の目に見下げ果てたものにしたのであり、人々の自由を守る意志を弱めてしまった。もちろん、軍国主義と極端なナショナリズムに対抗したドイツ人がワイマール共和国にもいたが、しかしそのような人々の数はあまりにも少なく、戦闘精神に欠けていた上に、いかなる強力な伝統からも支えられていなかったのである。こうして、ワイマール共和国は崩壊し、ナチスの時代に突入する(Kohn 1962, pp.306-327)。

次にコーンは、ナチスの四つの基礎として、ビスマルク主義、ロマン主義、人種主義そしてニーチェ主義を取り上げる。国民社会主義(National

Socialism)⁷⁾は、大衆と産業技術の時代におけるこれら四つの傾向の効果的な混合と通俗化を意味した (Kohn 1942, pp.39-54)。

ポスト・ビスマルクにおけるドイツの政治的手腕の急速な悪化は、ビスマルク自身に責任があった。議会のリベラリズムに対する彼の冷笑的な軽蔑と、彼の権威的指導は、中産階級を政府への積極的参加から排除し、政治的成熟と責任ある思考を不可能にしたのである。近代西欧において、人々が権力を信用せず、その乱用を恐れたのに対して、近代ドイツ人は、権力と国家の権威へのほとんど宗教的な崇拜を感じたのだった。その結果、プロイセンにおいては、西欧におけるような国家から独立し、国家に批判的な社会というものが発達しなかった。19世紀の60年代に、リベラリズムはヨーロッパ中で優勢であり、大陸全体が、イギリスのモデルに従うように見えた。ビスマルクが、リベラル民主主義に敵対して新しいドイツ帝国 (Reich) を作り出した時に、このリベラリズムの優勢は、逆転した。17世紀のイングランドが自由の普遍的理念を表現し、18世紀のフランスが理性を表現したのに対して、ドイツは、自己中心の権力と自己賛美のみを表現したのだった。西欧民主主義の感情的拒絶とドイツの強さの過大評価によって、ビスマルク主義の遺産は、世界情勢の現実的な評価を妨げることになったのである (Kohn 1962, pp.6-12, 1942, p.41)。

ビスマルク主義よりも、もっと根本的に西欧のリベラリズムに敵対したのが、ドイツ・ロマン主義である。ロマン主義は、19世紀以後のドイツ・ナショナリズムの発達を促進したのであり、啓蒙運動が西欧のナショナリズムの形態を形作ったのと同じくらいそれに影響した。ロマン主義は、ドイツ精神の偉大さの強調とともに、ドイツの独自性の意識を増大させた。ロマン主義者達は、過去を復活することによって、現在を豊かにしようと試みたのである。また、ナショナルな共同体または国家が、全ての美的政治的倫理的創造性の源とされた。ロマン主義者達にとって、国家は、単なる人間の仕事としてはあまりにも奇跡的であり、

むしろ自然の力と、神の計り難い意志の創造物であるように思えた。その主張に、個人主義、経済的合理主義そして法の下での平等と共通するものは何もない。このような西欧文明⁸⁾の放棄は、その後、長くドイツの思想に影響したのである (Kohn 1962, pp.49-63, 1942, pp.42-44)。

ところで、コーンによれば、ビスマルク主義とロマン主義は、同様の社会的基礎すなわちドイツ中産階級の弱さから生まれたとされる。つまり、イギリス、オランダそしてフランスにおいて、中産階級の商人 (merchants) と知識人が権力へと上昇して世論を形作ったのとは対照的に、ドイツは、商工業者 (trader) と法律家が社会の外側におかれ続けた貴族制の国であったのである。そして、国民社会主義は、そうしたビスマルク主義、ロマン主義から西欧に対する敵対を引き継いだのであり、それをもっとも高い程度にまで高めたのである (Kohn 1949, p.76)。

コーンは、ドイツ人で初めての人種主義の主唱者としてワグナー (R. Wagner) を取り上げている。但し、コーンは、ワグナーとヒトラー (A. Hitler) を完全に同一視しているわけではない。ワグナーは、自分を賞賛するユダヤ人を受け入れたのであるし、後には以下のように主張するようになっていた。もはや、ユダヤ人、民主主義そして資本主義にのみ人類の退廃の責任があるのではなく、肉食こそが、ユダヤ人とドイツ人の結婚と同じくらい大きな罪なのである、と。とは言え、ワグナーがユダヤ人に対する人種差別をしたことには変わりない。ユダヤ人は、ドイツの腐敗、芸術の退廃そして何よりもワグナーに対する聴衆の敵対に責任があるとされた。そして、(ヒトラーのワグナー崇拜にも促されて) もっとも極端な形で、ワグナー的な人種主義が、ナチス・ドイツの基礎となったと、コーンは述べている (Kohn 1968, p.66, 1962, pp.203-207, 1942, p.45)。

コーンは、ナチスの基礎としてさらにニーチェ主義を考えた。但し、ここでもニーチェを全面的に否定したわけではない。むしろ、ニーチェの思想のある面は非常に高く評価している。コーンに

よれば、「ニーチェは、宗教ではなく道徳的態度において、偉大な19世紀のプロテスタント」であった。事実、ニーチェは、反ユダヤ主義とドイツ・ナショナリズムを拒絶したのである。彼は、文化的創造性と軍事的権力を決して同一視しなかった。彼は、国家を信用しなかったのであり、創造的精神に対する国家の無関心または敵対心を確信していた。また、彼は、軍備競争に抗議した。力とそれが与える傲慢さを、彼は軽蔑した。そして、ニーチェは、個人の自立に情熱的関心を持ったのである。従って、ニーチェの思想がそのままナチスの権力国家につながるわけではない。

しかしそうは言っても、ニーチェの影響の危険な側面を軽視することは出来ない。コーンによれば、彼は、多くの教養あるドイツ人が、近代西欧文明から顔をそむけ、究極的には全ての文明に顔をそむけたという事実、責任がある。彼は、近代文明の全ての価値を否定し、苛酷な英雄時代の指導者として自らを宣言した。彼の英雄的歓喜に、中欧と東欧の多くの人々は、ヒューマニタリャンなりベラリズムと西欧の拒絶の正当化を見いだしたのである。(Kohn 1962, pp.210-218, 1942, pp.49-50)。

コーンがナチスを拒絶したことは、言うまでもない。「私達の時代に起こったことは、前例のないほとんど想像の出来ない事実であるが、文明の基礎の意識的拒絶であり、部族主義への先祖返り、歴史の傾向全体の逆戻りである。」(Kohn 1942, p.215)

ナチス・ドイツを峻拒したコーンはしかし、1945年の敗北以後のドイツについては、非常に楽観的であった。1945年の敗北に対するドイツの反応は、1918年とは異なるものだった。ドイツの民主主義は、1918年以後のいかなる時よりも、安定している。極端なナショナリズムが権力を握る兆候はない。また、首都はベルリンからボンに変わった。この地理的変化自体が、自己中心的ナショナリズムから西欧との協調への全般的政策の変化を象徴していた。いつの日か東ドイツとの統一によって国境が変化するであろう。その国境がどう

なるうとも、ドイツ連邦共和国の現在の政治体制が守られることが重要である (Kohn 1962, pp.344-352)。

コーンは、このようなドイツの変化を歓迎した。「嬉しいことに、1920年代と1930年代初期に生まれた多くの若いドイツ人は、自由への本当の愛を持っている。事実、この世代は、啓蒙運動以来のもっともリベラルで世界主義的なドイツの世代である。」「今日のドイツの若者の間での民主主義の強さは喜ばしい。」「現代のドイツとオーストリアへの多くの訪問の後に、これらのネーションの将来について私は全く楽観的になる。」(Kohn 1964, pp.187-188)

コーンは、ナショナリズムを西と東に分類した。フランスの二つの革命(1789年と1848年)とともに、ナショナリズムは東に波及した。西のナショナリズムが個人の自由を尊重したのに対して、東のナショナリズムは個人の尊厳よりも集団の権力を強調した。また、西のナショナリズムが「政治的運動」として始まったのに対して、東のナショナリズムは「文化的運動」として始まった。東では、発展が遅れており中産階級とその政治的発言力が弱かったために、ナショナリズムは文化的運動として始まったのである。西のナショナリズムが過去に対してあまり感傷的にとらわれなかったのに対して、東のナショナリズムは、西欧と区別するために、その「過去」の遺産にこだわり、理想化された祖国像を作り上げた。コーンのこの議論には、「民主主義」対「ファシズム」という第二次大戦史観が反映されている。ドイツはワイマール共和国を拒絶し、ナチス時代に突入した。ナチスには、ビスマルク主義、ロマン主義、人種主義そしてニーチェ主義の四つの基礎があったとされる。ナチスは西欧に敵対し、人種主義に基礎付けられた極端な東のナショナリズムであった。それとは対照的に、戦後のドイツについて、コーンは非常に楽観的であった。ドイツは、東のナショナリズムから西のナショナリズムへ転換したと判断したからである。

- (1) 西は「West」、東は「East」の訳である。「West」は西欧とも訳が出来るが、このことは、西欧のナショナリズムが、地理的に西欧に限られるという意味ではない。
- (2) 佐藤成基「ネーション・ナショナリズム・エスニシティ——歴史社会学的考察——」『思想』No.854, 1995年8月, 112頁
- (3) コーンは母国のこの様な状況を嫌って西欧に去ったのである(第1章)。
- (4) P・F・シュガー, I・J・レデラー編『東欧のナショナリズム』(刀水書房・1981年)9頁-1頁も参照
- (5) 中産階級が西のナショナリズムを形成し合理化したというコーンの見解については、批判もある。「西のナショナリズムをブルジョアジーが作り出したかどうか、明確ではない。私達が見て来たように、それは初期の君主と貴族の文化と活動に多くを負っているのである。同様に、ナショナリズムの合理性へのブルジョアジーの関与も、疑わしい仮説である。なぜなら、ドイツの産業ブルジョアジーのしばしば神秘的なパン・ドイツ感情や19世紀末における裕福なロシア商人による組織的で「原始的」なロシア・ナショナリズムへの賛同が見られるからである。」Anthony D. Smith, *National Identity*, (Penguin Books, 1991), p.81
- (6) Louis L. Snyder, *The Meaning of Nationalism*, (Rutgers University Press, 1954), p.117 このような分類の仕方は、あくまでも「理念型」に過ぎない。「理念型」と現実との混合がしばしば起こりがちである。このことをコーンは認識しており、「現実のいかなるナショナリズムも、それらのタイプを純粋な形で表現するものはなかった」と述べている(コーン 1988年, 139頁-140頁)。
- (7) 「National Socialism」は通常、「国家社会主義」と訳すが、誤訳である。
- (8) コーンが西欧文明について言及するとき、自由主義の諸理念が念頭にあるようである。彼は以下のように述べている。「西欧は挑戦に出

い、弱点に打ち勝つべき手段を、その自由主義の伝統の中に発見している。」(コーン 平成2年, 9頁)

第4章 多民族国家

ハンス・コーンは、様々な思想家について論じている中で、「ミシュレーやマッツィーニ、トライチケやドストエフスキーよりも賢明な人間はざらにあった。真に賢人の名に値するのはミルだけである」(コーン 昭和28年, 8頁)と述べていることからわかるように、ミル(J. S. Mill)について特に好意的である。コーンはミルから、就中、多民族国家の利点を学んだ。ミルの「考察を推し進めて行けば、結局幾つかの民族を包含する国家の方が、自由の観点から見て、より健全な世論の多様性を示し、圧政による世論の画一化の危険に陥ることが少ない、という結論を引き出すことができる。」(コーン 昭和28年, 43頁)一つの民族が単独で国家を形成するとき、その国家は専制的になる傾向があるのに対して、自由の基礎の上に立つ多民族国家内部の民族は、絶対主義の傾向を食い止めるというのがミルを通して得たコーンの評価だった。「自由思想家ミルにとっては、進歩は民族の独立と主権の上に基礎を置くのではなく、個人の自由と連邦自治の二原則をますます強化し、両者を結合することが進歩の基礎となると考えられた。」(コーン 昭和28年, 46頁)⁽¹⁾

アクトン卿も、ミルと同様の主張をしていた。「アクトン卿は、人間の自由のためには、一つの政治的国民の内部で、いくつかの民族集団に、平等で、自律的で、自由な発展を保証する多民族国家が最も望ましい、と主張した。」(コーン 1988年, 140頁)⁽²⁾ コーンは、このような見解について、以下の点を強調した。「多民族国家が、国家のおよび国際的次元で繁栄するのは、多数民族・少数民族の関係という感情が、心理的に存在しない時なのである。そのような状況とは、民族的、言語的、宗教的集団のいずれもが、国家は一方の集団を犠牲にして他方の集団と結びついている、という印象を受けないことに他ならない。」(コーン 1988

年, 141頁)

以上のように主張するコーンにとって、多民族国家の分析は特別な重要性を帯びていたのであった。少年時代のチェコ人とドイツ人の衝突に始まり、生涯を通じて様々な民族の対立・衝突を目撃してきた彼にとって、民族の共存がいかにして可能かは個人史からも大きな問題だったはずである。彼は、現実に存在している多民族国家をどのように分析したのであるか。コーンが分析したアメリカ、スイス、ハプスブルク帝国、ソ連の四つの多民族国家のうち、まずアメリカに関する研究から見て行こう。

コーンの最終的な定住地はアメリカであり、彼にとってアメリカ・ナショナリズムの研究は個人史からも必然的なものであったに違いない。彼は、研究を通じてアメリカ・ナショナリズムの特殊性を認識するようになる。「合衆国におけるナショナリズムは、多くの点で通常のナショナルな運動とは異なる。」「彼らは、通常個々のネーションを構成すると考えられているいかなる要素の支えもなしに、ネーションとして彼ら自身を設立した。」(Kohn 1961, p.15) こうした捉え方によるコーンのアメリカ研究は、後のアメリカ・ナショナリズムの研究に大きな影響を与えている⁽³⁾。

通常、ネーションの形成においてもっとも重要な要素は、宗教と領土である。しかし、アメリカでは、特定の宗教がナショナルな性格を決定することは、ほとんどなかった。ここでは、逆に、アメリカのナショナルな性格が、宗教に影響したのである。アメリカでは、ネーションの理念の統一こそが、宗教的精神的生活の自由な発達を保証する共通の枠組となった。また、領土に関して言えば、北アメリカの膨大な開かれた空間においては、フロンティア生活の移動性がネーションの特徴であり、農業フロンティアの消滅後もそうであり続けたのである。つまり、ネーションを統一したのは、言語、文化的伝統、歴史的領土、血統ではなく、理念であった。アメリカ人になるということは、その理念と自己同一化するということを意味したのである (Kohn 1961, pp.15-20)⁽⁴⁾。

この理念は、イギリスの自由の伝統であり、ロック (J. Locke) はこの伝統の代表的哲学者であった。ロックは、財産とその安全な保持を強調した。そして、彼は征服ではなく人の労働と労役に基いた財産の正当化をした。また、個人、自由、尊厳、幸福が国家内の全ての社会的生活の基本要素であり、政府は統治される者の自由な同意に基いた精神的信託であると考えたのである (Kohn 1948, p.182)。しかも、合衆国のイギリスからの分離は、自由という歴史的なイギリスの概念の普遍化のみではなく、19世紀初期の貴族主義のイングランドには存在しなかった社会的平等にも基礎付けられていた (Kohn 1961, p.52)。

イギリスにおいて真実であったものは、アメリカにおいてはさらに真実であった。合衆国は、初めから中産階級のネーションであった。それは、封建貴族が存在しない商工業社会 (trading society) であった。財産と階級は、生まれや相続ではなく、労働に基礎付けられていた。そして、イギリスにおけるように、合衆国における大衆民主主義は、自由の伝統に、政府権威の制限に、そして個人と少数者の権利の保護に忠実であり続けたのである (Kohn 1961, pp.27-31)。

19世紀に合衆国のナショナルな統一を危うくする二つの出来事があった。1812年戦争と南北戦争である。1812年戦争は、新しい西部の植民者の拡張主義とショービニズムによって引き起こされた。1814年にイギリスとの平和条約が結ばれ、アメリカの要求に応じたイギリスは、インディアンへの援助を止める。こうしてまだ若いネーションは自信に満ち溢れることになる。こうした中で、中央政府が土着民の権利を保護しようとしたにもかかわらず、これを植民者は無視したとコーンは述べている⁽⁵⁾。

南北戦争は、同じナショナルな遺産のリベラルな解釈と保守的な解釈の間の戦いであった。南部の人々は、彼らがアメリカの本来の理念により忠実であると信じたために、アメリカ合衆国から分離しようとしたのである。1861年の「反逆者」は、1775年の「反逆者」と同じ原理に訴えた。彼らの

運動は真の自由と真のヒューマンイズムの運動であり、彼らは専制政治に対して文明のために戦っていると、主張したのである。また、南部は、北部が、政治的従属と何よりも経済的搾取を強制していると感じていた。南部の敗北は、数的経済的劣勢のみではなく、1861年に南部は潜在的なネーションでしかなかったという事実の結果であった。他方で、北部の勝利は、リベラルな思想を救い強化したのである (Kohn 1961, pp.102-129)。

アメリカ・ナショナリズムのもう一つの特徴は、その連邦制との独特の結び付きである。連邦制は、町村以上の単位に自由と秩序を、多様性と統一をおりあわせる道であり、トクヴィルが考えたように、アメリカのような広大な領域を持つ国で多数派による独裁を避け、民主制を機能させるために不可欠の手段であった。連邦制度に固有の地方自治制度を通じて、アメリカの人々は政治過程に参加し、彼らが良い政治を行うのに必要な感情を鼓舞されたのである (コーン 昭和43年, 29頁)⁽⁶⁾。

同様に、アメリカ・ナショナリズムにとって重要なのが、開かれた入り口を持つ土地 (a land with open gateways) としての合衆国の性格 (a nation of many nations) である。移民の流入は、アメリカ・ナショナリズムを強化した。移民は、アメリカ人となったかつての同胞をまねた。移民の子供達は、物質的な長所によってのみではなく、自由と寛容の文化的価値によって、アメリカの生活に引き付けられた。異なる人種間の結婚もしばしばあったにもかかわらず、エスニックな集団は、少なくともしばらくの間は、独自の個性を保持する傾向がある。しかし、移民は、より深い意味で、すなわち精神的変容の意味で同化された。移民は、理念に対する忠誠によってアメリカ人となったのである。また、過去ではなく未来の強調が、多くのネーションからこの新しいネーションを作り出すのを促進した。移民が、旧祖国の歴史における無数の敗北と勝利を見ずに、共通の憲法と共通のアメリカの理念の枠組内で個人の活動に基礎付けられた共通の未来を見なければ、自由と寛容において彼らを統一することは出来なかったのであ

る。そして、歴史上、様々な問題があったにもかかわらず、このようなアメリカ・ナショナリズムの結合を可能にしたのは、合衆国の教育システムの成果でもあった。学校は、強力な統合機関であったとされる (Kohn 1961, pp.141-175)。

イギリスの自由の伝統を引き継ぎ、中産階級が発達し、未来を強調するアメリカ・ナショナリズムは、明らかに西のナショナリズムを表現しており、多民族の共存がうまく行っているのである。コーンにとって、このようなアメリカ・ナショナリズムは、ナショナリズムの理想に限りなく近いものだったに違いない⁽⁷⁾。

コーンは、アメリカと同様に、スイスに対しても好意的であった。「初めて私がスイスに行った一九二一年以来というものは、ヨーロッパ大陸の他のいかなる国よりも、スイスに親しみを感じてきたのである。私は、幸福な多くの月日を過したのであるが、ちょうどアメリカ合衆国においてと同様に、私により深い印象をあたえてくれたものは、その美しい田舎よりも、政治的・人間的風土であった。」 (コーン 昭和37年, 11頁)

コーンによると、フランス革命以前には、スイスの特徴付けるような国民的統一も民主主義もなかった。州 (カントン) は、中央集権的権威の確立は軍事的な権力闘争に巻き込むのみであったから、中央集権化のためにその自由や独立を犠牲にしようとは考えなかった。連邦ではなく州こそが祖国であって、人々は宗教や家族愛によって結び付けられていたのである。18世紀に入ると、宗教的連帯から感情的情熱や排他的要因が失われ始め、新しい愛国主義がゆっくりと生み出された。それは、古き自由の追想と憲法的自由に基礎付けられたのである。しかし、この愛国主義は、未だ州の愛国主義であり、国民的統一ではなかった (コーン 昭和37年, 29頁-35頁)

スイスの近代的国民性の基礎は、ナポレオンによって強制された1803年の憲法であった。この憲法は、スイスを混乱と激しい内戦から救い、自由と平等の新しい要請を満たした。1815年以後、この憲法は民衆の要望と尊崇の念とをますます高め

た。しかし、スイスの民族意識は、1815年には、その幼年期であり、忠誠心や政治的関心は未だ州に中心があった。その後30年たって初めて、スイス・ナショナリズムは、西欧自由主義の影響下で発展したのである。1848年にスイス人は民主的國家を形成した。この時に制定された1848年の憲法は、1803年の憲法を回顧してモデルとしたのだった。さらに、スイス・ナショナリズムは1789年の原理に向かって突き進んだ。こうして、スイス・ナショナリズムは急速に発達し、個人の権利と歴史的多様性を尊重しながら、スイスを一つの永続的な民主國家に作り上げたのである。この時期にスイス以外のヨーロッパ大陸の国々で自由主義者の勢力が敗北したのとは対照的に、スイスでは自由主義者の勢力が勝利し、デモクラシーと連邦政府に基づくスイス國家の建設は、1848年に達成された唯一の恒久の偉業となった(コーン 昭和37年, 51頁-120頁)。また、スイスは多言語多人種の国であり、連邦議会は1848年にスイス国内の三つの主要言語(ドイツ語, フランス語, イタリア語)を連邦の言語として認めた。同時代のヨーロッパの他の地域で人種的言語的相違が争いを招いていた中で、この注目すべき経験は、少数者への寛容と配慮と善意の精神によって可能になったのである(コーン 昭和37年, 185頁-186頁)。また、スイスが連邦制を採用したのに対して、当時の多くのヨーロッパ大陸の国々では、連邦という解決策は失敗していた。20世紀のヨーロッパ大陸における多くの戦争は、19世紀のヨーロッパの民族主義指導者達が連邦主義を排除したために生じたのだった。スイスでは、譲歩と寛容の精神、法律や伝統に対する深い尊敬などが、ヨーロッパ大陸で唯一の連邦制の実現を可能にしたのである(コーン 昭和37年, 154頁-155頁)⁽⁶⁾。こうして確立したスイス・ナショナリズムは、二つの世界大戦を耐え抜き、自由主義的な西のナショナリズムであり続けたのである。

コーンはこのように、スイスにおいて多民族の共存を可能にした背景を論じた。当時あまり注目されていなかったスイスのような小国に焦点を当

てたのは、先駆的である。後に、スイスは、サブ・カルチャーの分裂を前提とした安定モデルである多極共存型デモクラシーの国⁽⁹⁾として注目されるようになる。この多極共存型デモクラシーというモデルの多民族共存への適用可能性⁽¹⁰⁾を考察するにあたって、コーンによるスイス研究は参考となるであろう。

コーンは、西との対照で東の多民族國家としてハプスブルク帝国とソ連(ロシア)について論じた。その際、前章で述べた西と東のナショナリズムという分類は、ここでも基本的枠組となっている。つまり、西では多民族の共存が成功したのに対して、東では失敗したというのがコーンの基本認識である。特にハプスブルク帝国は彼が生まれ育った地域であり、彼自身の「反動的ナショナリズム」(第1章)の体験が帝国の分析に強い影響を与えていることは、言うまでもない。ハプスブルク帝国が多民族の共存に失敗した原因について、コーンの見解は以下の言葉に要約されている。「フランス革命が解放したナショナリズムと自由主義という二つの近代的な力は、前近代に深い根をもつハプスブルク帝国の存立を危うくしたのである。」「スイスは多民族、多言語國家において、民主主義と連邦制に基づく安定して民主的な秩序をうち立てるのに成功していた。しかしながら、オーストリアでは、王朝の保守性と、ハンガリー人やドイツ人の民族主義者の非妥協性により、そのような発展が阻止されていたのである。」(コーン 1982年, 1頁-2頁)

帝国の崩壊を準備した大きな要因の一つが、ハンガリーである。「1866年のドイツ連邦に対するビスマルクの勝利は、彼が作り出したドイツ帝国におけるリベラリズムと立憲政治の敗北を示した。ヨーロッパの将来にとっての同様の不幸は妥協(アウスグライヒ)だった。」それは、「ハンガリーにおける支配集団としての恵まれた立場に対する歴史的なマジヤール人の主張のみを満たした。」「その時から、新しく作られたオーストリア・ハンガリー帝国において、」「ハンガリーの側は、オーストリアの側の特徴である進歩的で民主的な

発展を共有しなかった。「傲慢なマジャール人の支配階級は、君主制の弱い統一を傷付け、そこに住んでいる人々の権利と平等ではなく、疑似神話的な過去に基礎付けられた完全に独立したハンガリーを設立するために絶え間無く働いた。」(Kohn 1964, pp.15-16) ハンガリーのナショナリズムは「文化的運動」として始まり、政治家や行政官ではなく、政治評論家、歴史家、詩人が指導していた。このようなハンガリー・ナショナリズムは、非ハンガリー・ナショナリズムを全ての点で劣っているものと考えており、このような考え方が、ハンガリーにおける民主主義の未成熟に決定的な影響を与えた(コーン 1982年, 37頁, 49頁)。

コーンは、帝国における多民族共存の方法として、連邦制が解決方法になりえたとしている。「連邦化は、一八四八年以降切望されていたものであり、実際のところ、帝国内の全民族のなかに成長し、ついには二〇世紀の破局を生むにいたる自己中心的なナショナリズムの荒廃から、中欧を守る解決方法であったかもしれないものであった。」(コーン 1982年, 63頁) このような連邦化をパラツキーは主張した⁽¹¹⁾が、この自由主義的な解決方法は、ドイツ人とハンガリー人とチェコ人のナショナリズムによって阻止されたのである。1918年の帝国を連邦化する最後の努力も、あまりにも遅すぎ、破綻した。この時も、ハンガリー人は連邦主義の原則に抵抗し、聖イシュトヴァーン王国に属する全ての領土の統合を主張したのだった(コーン 1982年, 77頁-78頁, 153頁)。

ハプスブルク家は、保守的であった。保守的な帝国は、世論に無関心で近代的なプロパガンダや宣伝を敵視したために、諸民族を統合する新しい忠誠心の基礎となるであろうオーストリア理念なるものを作り出そうとしなかった。その間に、諸民族はますます自分達の野心に没頭し、民族主義的デマゴギーに屈して行った。こうして帝国は、ドイツ人とハンガリー人のナショナリズムと、それに学んだ他民族のナショナリズムによって脅かされるようになったのである(コーン 1982年, 27頁, 75頁)。

帝国内のナショナリズムに脅かされた帝国は、外交政策の失敗(Kohn 1967, p.251, pp.262-263)によって1918年に崩壊する。長期間に及んだ第一次世界大戦がオーストリア・ハンガリーに国力を越える試練をもたらし、社会的不満が高まるとともに、ナショナリズムが噴出し、帝国を崩壊に導いたのである(コーン 1982年, 146頁)。

東のナショナリズムに対応する多民族国家と言っても、ソ連に対するコーンの評価はもっと複雑である。コーンは、まず1931年の夏に、ナショナリズム問題を研究するためにソヴィエト連邦を訪問した。この時の体験をもとに、彼はソ連におけるナショナリズムについて一書(Kohn 1933)をまとめている。彼自身が述べているように、当時「スターリン主義警察国家は、後の時期の粛清の狂気にまだ到達していなかった。ナショナリティは、彼らがレーニン(V. I. Lenin)の下で獲得したある程度の言語的文化的自由を未だに認められていた」(Kohn 1964, p.149)のである。そのために、コーンのソ連についての初期の評価には、共産主義に対する強い批判はあまり見られない。そこには、彼が以前に現地で見撃した3月革命における「革命と反革命の残忍性と乱暴」(第1章)と比べると当時のソ連ははるかに改善されており、共産主義の意義を、仮に問題はあるにせよ、否定し難かったという事情があるであろう。

共産主義は、ピョートル(Peter)の仕事を比較にならないほど大きな規模で進展させた。ピョートル大帝の改革は、遅れた国を近代文明に適合させる試みだった。しかし、彼は、西欧の哲学や知的洗練について考えたのではなく、その技術的優位に関心を持ったのである。改革の動機は、主に戦争の必要性であった。彼は後進的な人々に上から改革を押し付けたため、ロシアの生活に混乱を残したのみであった(Kohn 1948, pp.562-566)。共産主義は、中世的信仰の態度を19世紀の進歩への信仰と結合させることによってピョートルの改革を推進しようとした、というのがコーンの共産主義の理解である。

共産主義の信仰は、中世的であった。反対者は、

物事の真の秩序の敵であり、常に誤っている。妥協は存在しない。従って自由も欠如している。共産主義の下の芸術と科学の立場も中世的であった。それらは、個人の創造的情熱の表現ではなく、社会主義の強化に奉仕するものである。近代個人主義は、存在しない。コーンはこのように共産主義の中世的特色を強調はするものの、この段階ではファシズムや国民社会主義との同一視には否定的であった。「ナショナリズムのもっとも最近の表明であるファシズムと国民社会主義は、」「共産主義との表面的な類似とその曲解を多く持つにもかかわらず、それと共通するものは何もない。それらは、未だに生き続けるナショナリストの世紀に属するのに対し、共産主義は、歴史の新しい段階に属する。」「共産主義は、もはやネーションやナショナルな国家に生命を与える力をもたない。」(Kohn 1933, p.35)⁽¹²⁾

レーニンの見解によると、ネーションは歴史の特定の段階の産物であって、ブルジョアの時代にナショナリズムは発達したのだった。故に、社会主義の達成とともにナショナリズムは徐々に消滅し、ナショナリティ問題は着実に重要性を失うのであった。コーンは、ソヴィエト政府がナショナリティの問題を解決するためには、全てのナショナリティの完全な平等を達成し、遅れた人々を文化的経済的に改善し、新しい普遍的な共産主義の理念を浸透させなければならないとしている(Kohn 1933, pp.46-47, p.58)。

現実に、若い人々は、新しい理念を着実に吸収している。ロシア帝国は、ソヴィエト社会主義共和国連邦というスプラ・ナショナルな名前に変わり、ロシア人支配の傾向は注意深く避けられた。また、遅れた人々をもっとも進歩したロシア人のレベルにまで経済的文化的に向上させる必要があった。ソ連の人々の多くは都市の労働者ではなく、革命の初期において、国家、労働組合そして政党組織は、圧倒的にロシア人の手の中にあった。この状態を改善するには、ロシア人以外の人々を社会的文化的そして経済的に変容させるしかなかったのである。この経済的社会的変容は、中世

の伝統と慣習との衝突を意味し、政府がイスラム教の人々の激しい抵抗にあつたにもかかわらず、多くのイスラム教の婦人は、この解放運動を熱狂的に歓迎したのである。このような婦人の解放は、東の人々の状況を根本的に変化させた。共産主義運動は、若いイスラム教徒の間で着実に進歩しているとコーンは見ていた(Kohn 1933, pp.60-81)⁽¹³⁾。

革命以前のロシアにおいては、ロシア語が唯一の公用語であった。ソ連に公用語はなく、全ての人が彼ら自身の母語を使用する権利を持つ。ロシア語は、自由な同意によって連邦の共通語へと発達している。また、政府は、民衆語の発達を促進し、彼らの文学を促進し、そして彼らの言語と文学によって大衆を教育するためにあらゆることをした。政府は、短期間に多くの成功を成し遂げたのである。しかし、共産主義国家は、完全な言語の自由を認めることが出来ても、文化的自治と自由を認めることは出来なかった。マルクス主義の教義内容は、全ての人々に伝えるために、あらゆる言語で表現された。その目的は、全ての人々の文化的生活を新しい基礎に置くことにあった。それは、ナショナルな文化の死を意味する。ナショナルな熱望は、平和を保証し社会主義計画の実行と両立出来る限りにおいて認められた。しかし、この制限が極めて狭いために、連邦のネーションは、言語以外のいかなる自由も認められなかったのであった。このような共産主義とナショナリズムの衝突を終わらせるには、人々を共産主義者として養成するのである(Kohn 1933, pp.92-112)。

「新しい勢力が、人間史を形作り人間社会の形態を決定するかどうかは、社会主義を築き上げ人類の新しい型を形成することに成功するか失敗するかによるであろう。」(Kohn 1933, pp.113-114) コーンは当時、ソ連という新しい国に様々な可能性を見だし、その成否が「人類の新しい型を形成する」可能性にかかっていると判断していたのである。

ところが、コーンの訪問後、スターリン体制下において、ソ連では肅清の嵐が吹き荒れることに

なる。今日では「スターリニズム＝悪」という等式はほとんど常識化しており、民族問題についても同様である⁽¹⁴⁾。こうした中で、コーンは遡ってこのようなスターリン体制をもたらしたレーニンに対する評価をも変化させて行った。彼は、やがて第二次大戦後になると以下のようにレーニンをロシアにおける自由と民主主義の可能性を破壊した権力者として描き、共産主義の実験を全面否定する。

19世紀の終わりまでに、中産階級がロシアでも成長し始める。資本主義と企業精神が浸透し始め、法の下での自由と権利のための教育が本格的に着手されるようになる。すぐれた改革者や自由主義者が現れ、20世紀初頭の国会(ドゥーマ)において、イギリス式の憲法上の諸自由を主張して、独裁政権と懸命に戦った。彼らは、ロシアの真のヨーロッパ化を促進した。こうした中で、三月革命が発生しロシアはその歴史上で初めて自由な国となる。しかし、この自由なロシアはほんのわずかしかなかった。レーニンの指導の下にあるロシアの共産主義者達が、この民主的体制を転覆したのである。ロシアのヨーロッパへの統合は中断する。中産階級は大きく破壊された。ロシアのナショナリスト・メシアニズムが復活した。ガンジー(M. K. Gandhi)が権力を嫌ったのに対して、レーニンは権力を熱望したのである。こうしてレーニンは、西欧民主主義に敵対する初めての全体主義国家を打ち立てた。ソ連とドイツにおける「全体主義」は、文明を破壊したのである(Kohn 1949, p.65, p.66, pp.95-96, 1955, p.72, p.78, 1964, pp.101-102, コーン 昭和28年, 157頁)。

コーンのソ連に関する主張の変化は、明らかである。初期のソ連評価には、共産主義に新しい可能性を見いだそうとする姿勢が読み取れたし、共産主義とファシズムとを決して同一視しなかった。これに対して、後のコーンは、レーニンを自由と民主主義を否定した権力者として描くようになる。ソ連は、近代西欧文明を拒絶しており、その巨大な集中権力によってナチスと同じ全体主義国家であるとされたのである。このようなコーン

の主張の変化には、当時の政治状況すなわち冷戦下における米ソ間の緊張の高まりが影響していたのであろう。彼は冷戦の一方の当事者であるアメリカに住んでいたのであり、例えば全体主義論のような冷戦下で盛んに唱えられるようになった理論の影響を強く受けていたことは彼の用語法からも明白である。当然、敵国であるソ連に対する印象も以前とは異なって来るのである。

コーンは、西と東のナショナリズムという分類を基本的枠組として維持しながら、四つの多民族国家について論じた。西の多民族国家では、連邦制という政治体制の下で、多民族の共存に成功していた。それに対して、東の多民族国家では、ある国では連邦制という解決策を受け入れることが出来なくて崩壊し、他の国では、西欧文明を拒絶して全体主義国家を打ち立てたのである⁽¹⁵⁾。

- (1) J・S・ミル「代議制統治論」『世界の大思想 II-六』(河出書房新社・1969年)を参照
- (2) Lord Acton, "Nationality", in: *Essays on Freedom and Power* (Meridian Book, 1956)を参照
- (3) 例えば, Liah Greenfeld, *Nationalism*, (Harvard University Press, 1992), Chapter 5 (Notes: 5, 26, 71, 72, 122, 136, 148, 157)
- (4) アメリカはしばしば「理念の共和国」であると言われる。本間の以下の見解はコーンの議論とはほぼ同じである。「独立革命の指導者たちは、独立宣言において建国の理念を表明して評価の尺度をみずから示した。アメリカは理念の共和国として出発したのであり、したがって、理念と現実とのずれを指摘される運命をみずからに与えざるを得なかった。しかもこの理念が、移民の国において新来の移民をアメリカ社会に同化する原理となり、膨張を続ける連邦国家の統合の原理となった。アメリカ人は物質主義者であり、アメリカ文明は物質文明であるという考えは、おそらくアメリカについて抱かれている最も根深い見方であるが、アメリカをアメリカたらしめてきたのはアメリカの理念なのであ

- る。「そのうえ、アメリカの理念は、アメリカの独自性を支える原理であると同時に、アメリカを越えた普遍性を指し示すという逆説的緊張をはらんできた。」コーンは、アメリカの「理念」にもっぱら注目したために、「理念と現実とのずれ」を軽視してしまっている。本間長世『理念の共和国——アメリカ思想の潮流』（中央公論社・昭和51年）まえがき
- (5) 今日でも「フロンティアの白人農民にとっては、インディアンは排除すべき障害物とみなされていたが、啓蒙思想の影響を受けた建国期の指導者たちはインディアンが白人の文明を受容して文明化することを望んでいた」との指摘がある。しかし、仮にインディアンが文明化したとしても「文明化したインディアンを完全なアメリカ人として受け入れる用意があったかどうかは甚だ疑問であ」って、コーンは中央政府を美化するあまり、このような問題を無視している。有賀貞『アメリカ革命』（東京大学出版会・1988年）23頁-24頁
- (6) トクヴィルは以下のように述べている。「三つのものが、他のすべてにまさって、新世界における民主的共和政の維持に、競合して貢献しているように見える。第一は、アメリカの人々が採用した連邦制で、これが大きな共和国の強力さと小さな共和国の安全さとを享受させている。第二は、地方自治の諸制度の中にあると思う。これが多数（派）の専制を緩和し、人民に自由の味わいと自由であるための術とを同時に与える。第三は司法権の構成にあらわれる。」トクヴィル「アメリカにおけるデモクラシーについて」『世界の名著 40』（中央公論社・1980年）514頁-515頁
- (7) コーンは「彼らがプライバシーを尊重し邪魔をしないように注意深かったにもかかわらず、常に友好的で出来る限りのあらゆる方法で助ける準備が出来ていることを発見した」（Kohn 1964, p.157）と述べて自分の個人的経験からもアメリカ個人主義を称えている。しかし、ベラーの批判が出ている今日において、コーンの議論
- がどこまで有効かは慎重な検討がなされなければならない。また、コーンは黒人やインディアンの問題にほとんど言及しておらず、その点でも少々楽観的に過ぎる印象を与える。R・N・ベラー『心の習慣』（みすず書房・1991年）、Robert N. Bellah, *The Good Society*, (Vintage Books, 1992)
- (8) 今日でもコーンのこのような評価は継承されている。「歴史的にみれば、一八四八年以後のヨーロッパ諸国が、急激に集権的な国民国家形成への傾向を強めてゆくなかで、スイス連邦の行き方は対照的であり、ほとんど例外といえた。」田口晃「スイス現代史」『世界現代史 25』（山川出版社・1984年）284頁
- (9) 田口晃「「多極共存型」デモクラシーの可能性——最近のヨーロッパ小国研究から——」『思想』No.632, 1977年2月
- (10) Dimitris N. Chryssochoou, “Democracy and Symbiosis in the European Union: Towards a Confederal Consociation?”, *West European Politics*, Vol.17, No.4, October 1994
- (11) 矢田はパラツキーの主張を以下のようにまとめている。「重要なことは、パラツキーは」「オーストリア皇帝を、ツァーリないしドイツの支配にたいするスラヴ民族の擁護者に見立てている点である。」「このことは従来ハプスブルク帝国をただちにそのまま肯定することではない。ハプスブルク帝国は「その主権のもとにあるあらゆる民族、宗派の完全な同権の原則を、自己の存立の法的・道徳的基礎」としなくてはならない。そしてその政治的原理は、パラツキーによれば、「画一化的な中央集権的支配」にたいする対極としてつくられるべき連邦 *Föderation* である。」矢田俊隆『ハプスブルク帝国史研究——中欧多民族国家の解体過程——』（岩波書店・1977年）110頁-111頁
- (12) 当時(1933年)、共産主義とファシズムの共通性を強調する全体主義論はまだ唱えられていなかったことに注意すべきである。後述するように、コーンは後の研究でソ連とドイツを全体主

義国家として同一視して批判するようになるが、このような彼の主張の変化は、冷戦の進行に伴う全体主義論の流布と並行しているのである。栗原優「ファシズムと全体主義論」『歴史学研究』No.397, 1973年6月

- (13) ここでもコーンはあまりにも楽観的である。現在の研究水準に立った以下の主張を参照。「ロシア革命後においても、女性に対する差別と優越感がムスリム党员の間ですら見られた」山内昌之『ラディカル・ヒストリー』(中央公論社・1991年) 198頁
- (14) 塩川伸明『ソ連とは何だったか』(勁草書房・1994年) 39頁
- (15) 民族共存の方法として、コーンが連邦制に一貫して焦点を当てていることが注目される。

結び

ここまで、ナショナリズムの成立とその展開についてのハンス・コーンの議論を追ってきた。解放運動として始まったナショナリズムは、その地理的拡大とともに質的变化を伴い、個人の自由を抑圧し集団の権力を強調する傾向が見られるようになったと、コーンは主張した。しかし、このことは必ずしもナショナリズムの全面的否定へとコーンを導くものではない。何故なら、ドイツをめぐる彼の評価の変転からもわかるように、ナショナリズムが個人の自由を抑圧しているならば、ナショナリズムの在り方を変化させれば良いのであって、東のナショナリズムは西のナショナリズムに転換しうるからである。ところが、一方で、今日の世界においてナショナリズムそのものの存在意義が問われる事態が生じて来ている事にも注目する必要がある。すなわち、国際的相互依存の一層の進展である。国際的相互依存が進み、国家間が様々なトランス・ナショナルな交流の網で結ばれるようになると、国家は、自律性を失いに失ってくる⁽¹⁾。こうした中で、国家と直接に結び付いてきたナショナリズムのあり方も、変容を受けざるを得なくなってくるであろう。最後にコーンがこの点について、どのように考えていた

のか検討してみることにしよう。

コーンも、ナショナリズムが、限界に達しているという認識はもっていた。今日、ナショナリズムは、政治的経済的に、新しい状況にうまく適応出来ていない。かつて、個人の自由と幸福を増進したナショナリズムも、今日ではそれらを掘り崩しており、その存続のためにそれらを犠牲にする傾向も見られる。ナショナリズムと同時に生まれ、ナショナリズムとともに世界に広がった民主主義と産業主義は、相互依存が進む現代社会において、ナショナルな結合を越えて成長した。ナショナリズムは民主主義に具体的な現実化のための枠組を与えたのだが、しかし、それは、普遍社会の技術的地理的基礎が現れると、民主主義の現実化を逆に妨害するようになった⁽²⁾。つまり、個人の自由は、スプラ・ナショナルな基礎に基づいて組織されなければならない状況が生まれているのである。ところが、国民国家は、かつてのいかなる政治組織よりも大衆の感情に深く根をはっている。政治組織のあらゆる変化は、伝統の強い抵抗に直面する。とは言えしかし、かつて宗教がたどった道をナショナリズムもたどることが可能ではないか。今日のナショナリズムと同様に、宗教が政治と社会を支配していた時期があったにもかかわらず、果てしない残忍な宗教戦争が人類の平和と文明を脅かした時、啓蒙運動が宗教の非政治化をもたらした。この過程において、宗教はその強制的側面を喪失し、個人の良心の領域に止まることになったのである。同様に、ナショナリティの非政治化も考えられる。それは、政治組織との結び付きを失い、文化の領域に個人の感情としてのみ残るであろう。もしこのような時代が来るならば、ナショナリズムの時代は過去のものとなるに違いない (Kohn 1948, pp.22-24, p.192, 1942, pp.105-110)。

ナショナリティが非政治化されて、ナショナリズムの時代が過去のものとなることをコーンは予言する一方、同時に彼は、個人の感情としてはナショナリティが残りと述べた。つまり、コーンは文化的ナショナリズムの存続を予言したので

あり、ここでも彼はナショナリズムそのものを否定したのではなかった。彼は今日の宗教について、非政治化されたにもかかわらず、それは決して威厳を失ったのではなく、偉大な精神的力として残っているのだと指摘した。このことはナショナリズムについても同様であり、ナショナリズムの時代が過ぎ去っても、偉大な精神的力として文化的ナショナリズムが残り続けるのであろう。文化的シオニストとしてのコーンの言動はこのことを先取りしていたのであり、ナショナリズムの将来像についてのこのような彼の議論は文化的シオニストとしてのコーンの面目躍如と言える。国家との結び付きを失った文化的ナショナリズムは、「国民国家を政治組織の理想的形態」として認識しなくなることによって、国民国家を自明の前提としてきた現代世界を根本的に変革することになるであろう。

国家と結び付いたナショナリズムがまだ全盛を誇っていた時代に、コーンがこのような予期をなしたことは先駆的と言ってよかろう。文化的シオニストとして「国民国家の数を増大させることと主権を誇ることの賢明さ」に疑いを持っていたコーンにとって、国民国家は決して自明の前提ではなかった。国民国家は、個人の自由と両立する限りにおいて容認されるのであり、仮にそれが個人の自由を犠牲にして存続するのであれば、ナショナリティが非政治化され国民国家は理想的形態ではなくなるのである。

コーンは、人間の自由を守るために「権力機構を具えた国家」を抑制しなければならないと主張した。そのために、「政府権力を制限し市民権を守る西のナショナリズムについては、常に好意的であった。コーンは、アメリカとスイスに関する先駆的研究を通じて、西のナショナリズムの素晴らしさを証明してみせたのであった。ただ、西のナショナリズムの先駆的研究を成し遂げたとはいえ、理念と現実の間に存在するずれに彼はほとんど注目しなかった。故に、彼は西のナショナリズムを非常に楽観的に展望したのである。コーンによれば、「自由の遺産や精神の活力やすべての人に

伝える希望の独特なメッセージを注意深く守る西欧には、絶望すべき理由は全然ないのであった（コーン 平成2年、9頁-10頁）。このような西のナショナリズムも、相互依存が進む現代社会において、ナショナリティが非政治化され国家との結び付きを失うというのがコーンの見解であった。

コーンによれば、東のナショナリズムは、個人の尊厳より集団の権力を強調するのであり、「既存の国家の型と対決する形で成長した」のであった。ナショナリティが非政治化され国家との結び付きを失う現代社会において、東のナショナリズムの存在余地はなくなるであろう。なぜなら、国家なくしてはナショナリズムの西と東への類型化そのものが意味をなさないからである。このことは、相互依存の進展が、個人の自由を抑圧するナショナリズムの負の側面を止揚することを意味する。西と東という形でナショナリズムの光と影を描き出したコーンは、このような分類自体が意味をなさなくなる可能性を予言したのであった。東欧における民主化の進展は、一時的にはナショナリズムの噴出を促したとは言え、東のナショナリズム自体の変質を示している。相互依存の進展によって国家が揺らぐことによって、個人の自由を求める人々の願望が表面化したのである。

最終的には、ナショナリズムは「文化的運動」としてのみ残るのであった。このような議論は、あたかも東のナショナリズムを理想としているかのようなものである。しかし、重要な点は、前述したように、国家との結び付きを失っていることである。東の「文化的運動」は、実は常に国家を念頭においた政治運動であった。将来は、このような国家との結び付きが希薄になって行くと考えられる。

コーンは、常に個人の自由の主唱者であった。彼は、個人の自由の観点から社会現象を判断し、ナショナリズムも個人の自由を増進する限りで肯定的に評価された。仮に、それが個人の自由を犠牲にして存続するのならば、ナショナリズムは変質しなければならないのであった。西欧の生み出した個人の自由を守ることが、コーンの学問研究の生涯をかけた使命であったのである。

- (1) 山本吉宣『国際的相互依存』(東京大学出版会・1989年) 75頁
- (2) コーンがこの議論が具体的に何を指すのかは、彼の議論においては明確でない。恐らく、いわゆる「適切な共同体 (relevant community)」の問題があるであろう。David Held, “Democracy, the nation-state and the global system”, *Economy and Society*, Vol.20, Number 2, 1991, pp.141-143
- (3) ナショナリズムが噴出した要因について, Juan J. Linz and Alfred Stepan, “Political Identities and Electoral Sequences: Spain, the Soviet Union, and Yugoslavia” *Daedalus*, Vol.121 No.2, 1992 を参照

ハンス・コーン主要文献リスト

(本稿で引用したもの)⁽¹⁾

- NATIONALISM IN THE SOVIET UNION,
(George Routledge & Sons, 1933)
“The Genesis and Character of English Nationalism”, *Journal of the History of Ideas*, Vol.I, 1940
- WORLD ORDER IN HISTORICAL PERSPECTIVE, (Harvard University Press, 1942)
- THE IDEA OF NATIONALISM A Study in Its Origins and Background, (The Macmillan Company, 1948)
- THE TWENTIETH CENTURY A Mid-way Account of the Western World, (The Macmillan Company, 1949)
- NATIONALISM its meaning and history, (Van Nostrand Company, 1955)
- AMERICAN NATIONALISM An Interpretative Essay, (Collier Books, 1961)
- THE MIND OF GERMANY The Education of a Nation, (Macmillan, 1962)
- LIVING IN A WORLD REVOLUTION My Encounters with History, (A Trident Press Book, 1964)
- “Was the Collapse Inevitable?”, *Austrian His-*

- tory Year Book, 3 pt. 3, 1967
- “NATIONALISM”, in: *International Encyclopedia of the Social Sciences*, (Crowell Collier and Macmillan, 1968)
- MARTIN BUBER *Sein Werk und seine Zeit*, (Fourier Verlag, 1979)
- 『民族的使命 — ヨーロッパ・ナショナリズム論考 —』(みすず書房・昭和28年)
- 『民族主義の新しい様相』『アメリカーナ』3巻第2号, 1957年2月
- 『ナショナリズムと自由』(アサヒ社・昭和37年)
- 『ナショナリズムの世紀』(外交時報社・昭和43年)
- 『ハプスブルク帝国史入門』(恒文社・1982年)
- 『ナショナリズム』『国家への視座』(平凡社・1988年)
- 『自由西欧は没落するか』(公論社・平成2年)

- (1) コーンの文献については, “Books by Hans Kohn, 1922 to 1967”, *Orbis*, 10, No.4, Winter, 1967 を参照

(ばば たみお 北海道大学法学部修士課程修了)